

『官能のエチュード』

著:いおかいつき

ill: サクラサクヤ

「お待たせ。とりあえずビールな」

当然ながら、涼介の心の内を知らない滝川が、テーブルにグラスビールを二つ置いた。涼介は平静を装い、ありがとうございますと礼を言って受け取る。

「とりあえず、再会を祝して乾杯ってとこかな」

滝川言葉に、涼介は苦笑いを浮かべつつ、滝川に合わせてグラスを持ち上げ、軽くぶつけて心地よい音を響かせた。

「しかし、朝は驚いたな」

今さらながら、滝川が衝撃の再会を思い出したように口にする。

「滝川さんがあまりにも平然としてるから、てっきり気付いてないもんだと思ってました」

涼介は会議室で目を合わせた瞬間の滝川の態度を指摘した。明らかに動揺した涼介とは違い、まったく不自然さは感じられなかったのだ。

「そこはほら、社会人としての対応ってやつだ。お前もなかなかうまくとぼけてたじゃねえか」

「滝川さんが気付いてないんだと思ったんですよ」

「あれだけ熱心に見られてちゃ、気付かないでいるほうが無理だ」

滝川はあのときのことを思い出したのか、くっと喉を鳴らして笑った。

「すみません、つい目が離せなくて……」

涼介は顔を真っ赤にして、情けない言い訳と謝罪を口にするしかない。

「謝ることじゃない。見られて困るもんでもねえし、そもそも困るくらいなら、あんなどこでしねえっての」

涼介の謝罪を滝川は豪快に笑い飛ばす。

確かに滝川の言うとおりの。照明のついた部屋の中、しかもブラインドも下ろしていない窓際でセックスに及ぶというのは、見られることを前提としているか、もしくはそれを望んでいるとしか思えない。

「でも、大丈夫なんですか？ 人に見られて後々まずいことになったりしませんか？」

「写真撮って脅(おど)されたりとか？」

「そういう可能性も……」

「平気だろ」

どんな根拠があるのか、滝川はまったく気にしている様子はない。

「あそこ、時間貸しのレンタル事務所なんだよ。借り主なんて素人には調べられないだろ。それにあんときは一緒にいた奴が借りてて、俺は呼び出されて行っただけ」

滝川の淀みない説明に、一応は納得したものの、驚きはますます強くなった。自分の所有ではない事務所で、よくあんな大胆なことができたものだ。涼介なら緊張と不安で勃起すらしないだろう。

「仁」

不意に滝川の名前が呼ばれ、自分のことではなくても涼介もその声のほうに顔を向けると、料理の盛られた皿を手にした男が、テーブルのすぐそばに立っていた。

「おお、悪い。持ってきてくれたのか」

「客使いが荒いよね、ホント」

滝川と親しげに話ながら、男はテーブルに皿を載せる。よくあることなのか、言葉とは裏腹にその表情は笑顔だった。

「素敵な彼だけど、声をかけちゃ駄目？」

男が意味深な台詞と流し目を涼介に投げってくる。まだ滝川に対してゲイだと認めていないから、涼介はどう対応していいかわからず、助けを求めるように滝川を見つめた。

「今日は駄目だな。大事な話の真っ最中なんだよ」

「了解。じゃ、また今度ね」

さっきの台詞はただの社交辞令だったのか、男はあっさりと答え、右手をひらひらさせて、すぐに立ち去った。

「勝手に断ったがよかった？」

「ありがとうございます」

涼介は安堵の表情を浮かべ、素直に礼を言った。その態度を見た滝川が、

「こういう店には慣れてないみたいだな」

ようやくというのか、ついにというのか、涼介がゲイであることの核心を突くような言葉を口にした。

「正直、苦手です。滝川さんはよく来られるんですか？」

涼介は滝川の反応を見つつ、まだ言い逃れのできる言い方で誤魔化し、逆に問い返してみた。

「そうだな、時間があれば週に一回は来てる」

「このお店に？」

「いや、ここ限定じゃなくて、この街にとって意味だ。お前は二丁目そのものが苦手そうだな」

見透かしたような滝川の言葉に、涼介はもう逃げられないことを悟った。ゲイ御用達のホテルにいたことは、知らずに入ったと誤魔化せても、ここまで正直に話してくれる滝川に、嘘を吐くことはできない。

正直に話そうと覚悟を決めた涼介は、勢いをつけるためにビールを一気に呷(あお)った。そうしてやっと自分もゲイだという前提で話を始める。

「この街が苦手なのは本当です。でも、それ以上にここにいることを誰かに見られたらって思うと、落ち着かないんです」

「人に知られると困るか？」

「困りますよ、もちろん」

自嘲気味に笑って、涼介はまたグラスを呷る。とても素面(しらふ)ではこんな話ができないから、早く酔ってしまいたかった。おかげでビールはあっという間に空になり、それに気付いた滝川が、カウンターにいるマスターに向かって手でおかわりの合図を出す。

「滝川さんはカミングアウトしてるんですか？」

涼介はそんな滝川の様子を見ながら質問した。

「誰彼構わず言っまわってるわけじゃない。けど、お前がゲイだってのはすぐにわかったからな」

「あのホテルにいたから？」

「それもそうなんだが、やっぱり、お仲間はわかるもんだろ」

だから確認作業は必要なかったのだと、滝川は軽いウインクを投げてよこし、涼介のために新しいビールを受け取りに席を立つ。

また一人になった涼介は、大きな溜息を吐いた。ばれていたことに驚きはないし、むしろ、はっきりと言われたおかげで気持ちも楽になった。けれど、そうなるも堂々と振る舞う滝川と自分を比較せずにはいられない。

「結構、飲むみたいだから、ピッチャーでもらってきた」

戻ってきた滝川の手には、ビールがたっぷりに入ったピッチャーがあった。勢いをつけるためでしかなかった、さっきの涼介の飲みっぷりを滝川は酒好きだと判断したようだ。事実ではないが、飲まずにいるのは手持ちぶさただから、今はありがたい。

本文 p43～49 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>